



# Newsletter

No.10 (2003.3.15 発行)

## JAICOWS会長挨拶

島田 淳子

(日本学術会議第 16, 17 期第六部会員, 昭和女子大学教授)

JAICOWS の皆様、お久しぶりです。今年は日本学術会議第 18 期が終了し、第 19 期会員が選挙される年です。去る 2 月 20 日、総合科学技術会議、日本学術会議の在り方に関する専門調査会は「日本学術会議の在り方についての最終まとめ(案)」を提出致しました。学術会議の一層の発展、女性会員の増加、そして女性研究者の環境改善を願うこと切なるものがあります。しかし日本学術会議の在り方がどのように変わっても、JAICOWS の役割は変わりません。今後共に皆様とご一緒に努力して参りましょう。本日お届けする Newsletter10 号には、12 月に日本学術会議の「ジェンダー問題の多角的検討特別委員会」が主催した公開シンポジウムの報告の他、遅ればせながら「第 18 期日本学術会議の会員推薦にあたっての女性候補者の推薦について」の調査結果の概要などが掲載されています。来る 3 月 27 日に開催される今年度の総会および学術会議ジェンダー問題の多角的検討特別委員会主催シンポジウムのお知らせも掲載されています。会員の皆様のご参集をお待ち致しております。

### 参加報告

#### 公開シンポジウム 学術の世界におけるセクシュアルハラスメント～加害と被害～

2002年12月24日(火)13:00~17:00, 日本学術会議大講堂において、日本学術会議「ジェンダー問題の多角的検討」特別委員会主催の上記公開シンポジウムが開催されました。主旨は「セクシュアル・ハラスメントの問題は、最近になってさまざまな大学・研究機関・学協会で表面化しており、日本の学術研究に大きな影響をおよぼしていることがわかってきた。そこで学術の世界におけるセクシュアル・ハラスメントに焦点をあて、学問の世界に特殊な状況のもとでおこる加害と被害の構造を認識し、より良い学術研究体制を構築するための政策提言へむけた議論を行う」というものです。

池内了幹事(名古屋大学教授)の開会の辞に続いて、原ひろ子氏(放送大学教授, ジェンダー特委幹事)の司会で、1. 博士号取得者の被害実態について; 加藤万里子(慶応義塾大学助教授, ジェンダー特委WG委員), 2. 大学の法的責任 -- 教育研究環境配慮義務との関連で; 松本克美(立命館大学教授), 3. キャンパス・セクシュアル・ハラスメントの解決にむけて; 戒能民江(お茶の水女子大学教授), 4. 国立大学等におけるセクシュアル・ハラスメント防止等について; 文科省官房人事課審査班主査 出澤 忠, の4氏が報告されました。

詳細は、2003年1月24日付の科学新聞に掲載されていますが、簡単にまとめてみます。報告1(加藤)では、加害者への処分の軽さや対応までの時間がかかりすぎる現状など、大学側の管理不備が指摘

されました。被害者の名誉回復や加害者の再教育も現在ではまだ欠けている視点のようです。報告2(松本)では、女子大生と大学教官との間で起こった過去の訴訟の判例が紹介され、大学の責任が問われることを報告されました。司法の場では、教育上の支配従属関係や学生が教育を自由に受ける環境の整備が重視されているとのことです。“大学の自治”と称して外部からの介入を嫌っていた構造は改める時期に来ているようです。報告3(戒能)では、2002年7月に開催されたキャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク第八回全国集会で明らかになった課題について報告されました。セクハラのない環境を実現するためには“各大学が経験を共有化していくことが重要な対策になる”とのことでした。最後の報告(出澤)は行政の立場から、平成13年度4月に施行された『文部科学省におけるセクシュアル・ハラスメント防止等について』の枠組みを紹介されました。同省では国立大学へ学内ホームページの充実を推進しているそうです。

後半にはディスカッションの時間が設けられました。会場からは、「各大学にセクハラ専用の窓口は設置されているが、相談や苦情をいっても実際はほとんど相手にされない。」といった、大学側の対応のまずさを指摘する意見が数多く出ました。窓口を担当できる人材がまだまだ不足しているようです。

シンポジウム参加者のアンケートよりいくつかの感想をピックアップしてみます。

＜全体の内容・企画について＞

- ・行政担当者の意見が聞くことが出来てよかった。
- ・文部科学省だけでなく、厚生労働省、法務省、総務省など砲弾的な議論の場の継続を期待する。
- ・女性研究者の今後の活躍に期待する。
- ・セクハラは個人の問題であると同時に共通の問題であるとの思いを強く認識した。
- ・良い企画だったのに参加者が少なかったのが残念だった。(複数)
- ・各大学の対応や文科省の姿勢が理解できた。教員個々人の考え方に深い問題があり、それが前向きに取り組む個人をさまたげる方向にあるように思った。時間がかかるが大きな動きになっているので、引続き
- ・努力をお願いしたい。

＜学会会議に対して＞

- ・日本学会会議がこのテーマをとりあげたことに大変共感する。
- ・会場が学会会議で大変よかった。夢をもって研究を進む女性の大部分が撤退をよぎなくされていると思う。このような場でまた開いてほしい。

＜四氏の報告について＞

- ・「加害者への教育」といった観点は省庁の出しているガイドラインから欠けていて残念である。
- ・セクハラ防止策は、学生・研究者の権利のためだけでなく大学の義務として講じるべきであるという視点が新鮮だった。
- ・文部科学省は、特に女性大臣であるこの機会に、

この問題に対する多くの予算や人材の確保をお願いしたい。

- ・個々の対応がすべて各大学任せというのに啞然とした。「各大学で対応しなさい」「各大学で努力しなさい」では事態は改善しないのでは。
- ・私立大学を含めたすべての教員を対象に文部科学省として啓蒙活動をすべき。
- ・セクハラや人権侵害に関する取り組みを国からの補助金査定の際考慮すべき。
- ・私立大学に通う学生の権利についても、厚生労働省に任せるのではなく文部科学省が責任を持って扱うべき。

教育や研究の場で、セクシャルハラスメントが起これば人権が侵害されるのは許されないことだと思います。自由な研究の場を提供すべき大学側の、責任ある積極的な対応が必要です。その中には、加害者の処分だけでなく、被害者の権利回復や心のケアも含まれるべきです。すべての教職員・学生が“セクシャルハラスメントとはなにか”を学ぶプログラムも必要だと思います。それは国立大学だけでなく私立大学や研究機関にも不可欠なことでしょう。また、教員が教員を調査するのに限界があるのならば、必要に応じて第三者機関の介入もやむをえないのではないかとの印象も受けました。

教育研究の場はどうしても閉鎖的な環境になりがちです。それだけに、性別や身分(今回の場合は例えば学生か教員か、あるいは助手か教授かなど)にかかわらず、相手のことを思いやる気持ちを忘れないでいたいものだと思います。

(中山 榮子)

## 科研費の研究期間でも育児休業が可能に

2003年3月7日付の科学新聞によると、科学技術・学術審議会の研究費部会で、科学研究費補助金の研究計画の途中で育児休業をとれるよう、運用を弾力化することを大筋で了承したとのこと。現在では、科研費をもらっていても、育休のため6ヵ月以上の中断があると、科研費はそこで断念しなければなりません。今後は、育休をとっても、育休があけた時に科研費を再開することができるようになります(詳細は文科省で

検討中)。

2001年のJAICOWS と5研連共催シンポジウム「科学研究費と女性研究者」でも、このことについて熱心な意見が出ました。出席した文科省の研究助成課企画室長(佐久間研二さん)にフロアから多数の方が意見(陳情や苦情)を出したことや、日本学会会議ジェンダー特委から文科省等に要望を出した成果だと思います。

(加藤万里子)

## 第18期日本学会の会員推薦にあたっての女性候補者の推薦等について (調査結果概要)

2000年3月、上記「第18期日本学会の会員推薦にあたっての女性候補者の推薦等について」というアンケートが、各学協会に配布されたのをJAICOWSが評価してとりあげたことをご記憶の方も多と思います。その結果報告が、第17期日本学会「女性科学者の環境改善の推薦特別委

員会」から2000年7月10日付で出されていることを第18期日本学会「ジェンダー問題の多角的検討特別委員会」が知ったのは、2002年の終わりです。皆さんも関心をもって居られることと思いますので、要点のみを報告します。

アンケートは、第18期日本学会登録学術研

究団体(1356団体)のすべてに郵送されました。回収数は746件で回収率は55%(回収率がもっとも高かったのは第6部農学部門の63.2%, もっとも低かったのは第2部法学部門の42.9%)でした。この集計に、日本学術会議事務局は大変時間がかかったとのこと。その回答では、会員候補754名(うち男性741人, 女性は42人), 推薦人は1226人(男性1156人, 女性70人)で、いずれも全体の0.6%という低さです\*。「第18期の日本学術会議会員候補者の選定及び推薦人の指名に際し、女性の増加のための配慮としてどのような措置をとったか」という質問にたいしては、「特段の措置を講じなかった」が4割にのぼる310団体ともっとも多く、「理事会・総会において議題とした」が3割を占める229団体でこれに次ぎます。その次が「自学会における女性会員数、属性等を確認した」という189団体(全体の4分の1)です。

「女性会員の育成策についての検討」の質問では、「女性会員を役員等に積極的に登用する」が270団体(36%), 「自学会の女性会員を増やす方策を検討する」が208団体(28%)で、あわせて478団体(約3

分の2)が積極的姿勢を示しましたが、243団体(3分の1)は「検討する予定はない」という解答でした。

「今後の日本学術会議会員の女性候補の選定及び推薦人の見込み」については、「なんともいえない」が半数を少し上回る386団体で、「積極的に考慮したい」は105団体(14%)に過ぎませんでした。このアンケートが来た2000年3月、私は社会政策学会の代表幹事を務めており、女性候補\*\*をたてて推薦人にもなっていましたので、幹事会にはかつて積極的の回答を提出したのはまだ記憶に新しいところです。第19期の選挙の取り組みが遅れ、2月20日に、総合科学技術会議、日本学術会議の在り方に関する専門調査会が出した「日本学術会議の在り方についての最終まとめ(案)」を読むと、この先が不透明ですが、この調査結果から見ても、学術の世界への男女共同参画が切に望まれます。

\* 実際の会員候補は793人(うち女性46人), 推薦人1868人(うち女性95人)でした。

\*\*その女性候補は落選でした。

(伊藤 セツ)

## 2002年度JAICOWS総会のお知らせ

下記の通り総会を開催します。会員の皆様のご参加をお待ちしています。

会長 島田淳子

日時 2003年3月27日(木) 11時~12時

場所 日本学術会議(5階 第1部室)

議題 2002年度活動報告と会計報告・2003年度活動計画と予算・その他

同封の葉書で折り返し出欠・委任状等をお願いします(3月25日必着)。

## 日本学術会議「ジェンダー問題の多角的検討特別委員会」公開シンポジウム研究者への育児支援

2003年3月27日 14:00-17:00, 上記シンポジウムを開催します。詳細はこのニューズレターの最後のページをご覧ください。シンポジウムの主旨は次のとおりです。

21世紀の日本の科学をより豊かに実り多いものにするためには、さまざまな発想をもったいろいろなタイプの研究者が、自由に学問の世界に参入できるような学術体制を構築することが望まれている。学問の世界での男女共同参画は、最近、進展をみせはじめています。文科省や国立大学・研究機関での通称

使用や、各学会の大会開催時に保育室が設置されるなどの動きはその例である。しかし統計が示すように、日本は諸外国にくらべ、女性研究者の割合が特に理工系で低いなど、豊かな人材確保の上でまだまだ改善の余地がある。ジェンダー特委では、継続的に学術体制の中のジェンダーバイアスを改善するための問題提起を行ってきた。昨年のシンポジウム『女性研究者と科学研究費』につづき、今年には育児支援をとりあげ、問題点を明らかにし、具体的な政策提言へむけて議論を喚起したい。

このニューズレターは、担当の伊藤セツ・加藤万里子・中山榮子が編集しました。

連絡先：女性科学研究者の環境改善に関する懇談会(JAICOWS)事務局

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7

昭和女子大学女性文化研究所内 担当幹事 伊藤 セツ

Tel 03-3411-5096 Fax 03-3411-5264 E-mail jo-2100@swu.ac.jp

<http://sunrise.hc.keio.ac.jp/~mariko/jaicows/>

事務センター：〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-7-2 大橋ビル 株式会社ワールドプランニング

Tel 03-3431-3715 Fax 03-3431-3325 E-mail world@med.emall.ne.jp

第18期日本学術会議「ジェンダー問題の多角的検討特別委員会」公開シンポジウム

# 研究者への育児支援

日時：2003年3月27日 14:00-17:00

場所：日本学術会議(地下鉄千代田線乃木坂駅下車すぐ)入場無料，予約不要

主催：日本学術会議第18期「ジェンダー問題の多角的検討特別委員会」(「ジェンダー特委」)

共催：JAICOWS (女性科学者の環境改善に関する懇談会=Japanese Association for the Improvement of Conditions of Women Scientists)

天文研連，家政学研連，木材学研連，基礎法研連，その他の研究連絡委員会(交渉中)

総合司会：岩井宣子(日本学術会議第18期「ジェンダー特委」委員，第二部会員，専修大学教授)

開会挨拶：島田淳子(JAICOWS会長，日本学術会議第16,17期第六部会員，昭和女子学大教授)

挨拶：蓮見音彦(日本学術会議第18期「ジェンダー特委」委員長，第一部会員，和洋女子大学人文学部長)

司会：原ひろ子(放送大学教授，日本学術会議第18期「ジェンダー特委」幹事)

報告：

- ・研究者と子育て --- 文科省科学技術振興調整費による調査研究結果報告  
都河明子(東京医科歯科大学教授)
- ・応用物理学会のアンケート調査報告より  
堂免 恵(富士通カンタムデバイス)

パネルディスカッション：『楽しく子育ても研究も』  
《パネリストの自己紹介と各分野の概況報告》

- ・加藤万里子(天文学研連幹事：慶応義塾大学助教授)
- ・中山榮子(木材学研連委員，昭和女子大学助教授)
- ・堂免 恵(応用物理，富士通カンタムデバイス)
- ・池島(片岡)宏子(医学：慈恵会医科大学助手)
- ・文部科学省関係者：大木男女共同参画学習課長

討論

有志による声明



\*\*\*\*\*

問い合わせ先：加藤万里子(慶応義塾大学助教授 ジェンダー特委WG委員) mariko@sunrise.hc.keio.ac.jp  
慶応大学(天文学教室) fax (045)566-1102 電話(045)566-1135(直通) URLhttp://sunrise.hc.keio.ac.jp/~mariko/